
~ありがとう~

510

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～ありがとう～

【Zコード】

N5241A

【作者名】

510

【あらすじ】

今また君に会えるなら俺は「ありがとう」と言いたい。この言葉を言えなかつた事に俺は後悔している…ずっと後悔している…

プロローグ

「旭、起きな~」

母親の「デカイ声で目を覚ます。

「ふああ~眠いしよ……」

今は昼の12時過ぎ。仕事は夕方近い時間からなので、最近はいつもこの時間まで寝ている。まだゆっくり寝てみたいが仕事に行かなくては行けないので、俺はしきりに仕事疲れで重たい体をゆっくり動かし、居間に向かう。

居間に行くとすでに昼ご飯が出来ており俺は眠たい目を擦りながら食べる。

さっそく昼ご飯を食べ終え会社に行く準備をする。

顔を洗い、歯を磨き、一応髪を整え、会社の作業服に着替える。そして、母親が作った弁当を鞄に入れて、車で片道40分かけて会社に向かう。これが、今の生活スタイルだ。

この生活がずっと続くと思っていた。彼女に会いつ前までは……

第壹話・平凡な仕事な日々

「あき～おはよ～」

会社に出勤し仕事場に向かう途中、後ろから声をかけられた。振り返つてみるとそこには同期に入社した幸が笑顔で立っていた。

「おはようさん。幸はいつも元気やな～」

俺がテンション低めに挨拶すると幸は明るく、

「あきがテンション低いだけだつて～女の子に挨拶する時はもつと元気に挨拶しないとそんなんじゃ女の子にモテないよ」（余計なお世話だよ…そして何で女の子に挨拶する時元気に挨拶しなきゃいけないんだ？？）と心中で思つた& amp; 突っ込んだが、あえて口には出さなかつた。

この子は川上幸恵かわかみさちえ幸恵はいつも明るく活発な子だ。髪は黒で片の位置ぐらいまである。身長は160前後、ぐらいで目がクリクリしており、なかなか可愛いちょっと天然が入つている子だ。

「は～い！分かりました。これから気を付けます」

「分かればよろしい（笑）それじゃあ仕事お互い頑張りうね～じやあねえ～あき～！」

と手を振つて幸は自分の仕事場に向かつて行つた。幸は俺の事を

「あき」

と呼んでいる。俺の本名は宍戸ししど 旭あさひ

何で

「あき」

と呼ぶのか謎だ。何で

「う」

を付けないんだ？？と初めは疑問に思つたが俺も幸恵の事を幸と呼んでいるし、まあ深くは考えなかつた。

幸と挨拶を交わした後、仕事場に行き仕事を始める。仕事の内容は車のパーツを造つてゐる。これがまた眠たくなる…何時間も同じ作

業の繰り返し…これが毎日続く。まだ入社して1ヵ月しか経つていないので当然といえば当然だ。ほんの2カ月前はまだ高校生で机と椅子に座つて授業を受けていたのだから。俺は一日のノルマ個数を仕上げるために黙々と作業をやり続ける。

そして、長い仕事が終わる。終わるのはいつも夜中の12時過ぎ…。

「やつと終わつた」

これが最近の俺の口癖になっていた。

仕事が終わり車に乗り込み、タバコを一服している時に何気なくケータイを見た。誰からかメールが届いていた。

「誰からだろう??」

と、思い見てみると高校の頃の友達からだった。メールの内容は「今度の休みの日に入社祝いをかねてみんなで飯食いに行こまい。」

……このメールが全ての始まりだったのかもしない。このダチからのメールがなかつたら俺と凜花が会う事はなかったのだから…

第弐話・待ち合わせ

土曜日の朝の10時。俺は今、家の近くのコンビニで車で来ている。友達と飯に食いに行くためだ。

俺が住んでいる町はほとんどが山と田畠に囲まれている田舎町。なので待ち合わせをする場所はコンビニか公園ぐらいしかない。

車で友達を待つていると初心者マークを付けた車が俺の横の駐車場に止まった。

「お～す！旭あ～久しぶりだな。」

彼の名前は浩一。^{ひらいち}浩一とは中学、高校と一緒に、高校時代では色々とバカな事をやって、一緒に停学処分まで受けたぐらいの仲だ。性格はとても面白い奴で、中々カッコイイ。そして羨ましい事に彼女持ちである。

「お～っす！もち元気やで～（笑）それで今日は誰が来るの？」

俺が浩一に聞くと浩一は、

「まだ旭以外は決まってないんだよなあ～これが。」

「マジっすか！？男2人で、飯食いに行くのはいくらなんでも悲し過ぎるしちゃ～！」

「みんなに聞いたんだけど、忙しくって断られたんだよね～」

「それじゃあ～女でも呼びますか！？（笑）」

俺が冗談で浩一に言いつと浩一が、「いいねえ～それじゃあ適当に聞いてみますわあ～」
そう言いつと浩一は誰かに電話をしました。

（浩一よ…お前彼女いるのにいいのか？？）
と思つたが浩一はいつもこんな感じで言いつても、

「問題ないっす！」

といつも答えるので、口にはまださなかつた。

「……それじゃあ、また後で連絡してなあ～」
と浩一が電話を切る。

「誰に電話してたん？」

俺が浩一に聞いた。

「春樹！会社で知り合った子と一緒に来るってさ。」「浩一が嬉しそうに言つた。

「ああ～春樹さんかあ～」

加藤 春樹。

彼女とも浩一と一緒に中学、高校と一緒にだつた女友達である。性格もよく優秀。そして可愛いので、男女共にから人気は高かつた。高校の時はクラスは3年間とも違つたが、それなりに話しあしていたのでそれなりに仲はよかつた。なので、春樹が飯と一緒に食いに行くと浩一から聞いた時もこの時は何も思わなかつた。

「やういえば、会社で知り合つた子も一緒に来るって言つてたけど、どんな子なんやううなあ～？」

「ああ～。ま、会つてからのお楽しみって事にして、俺らは先にファミレスに行つてますか！？」

と言つて浩一は車のエンジンをかける。

「そうやな。それじゃ行きますか！」俺も車のエンジンをかけ、俺達2人はひと足先にファミレスに向かつた。

「」の時、俺は、

「春樹が会社で知り合つた友達かあ～。ビリーチう子かな？…ま、ど

うこう子でもいいけどね。俺は飯が食べればなんでもいいや。
と、ぐらいしか思っていなかつた。しかし、その後、俺は運命的な
出会いをする…。

第参話・出会

「ああ～腹へつた～何食べよっかな～。」

「俺と浩一はひと足先にファミレスに来ている。

「せっぱつ、安くって、うまくて、量が多いこのっしょー（笑）」

メニューをみながら浩一が嬉しそうに言った。

（…わすが浩一やな…。まあ、間違った考え方じゃないけどな。）

俺と浩一がメニューを見ながら何を食べよか考えている時に、春樹の声がした。

「『じめ～ん。遅れちゃつてー。』

春樹が申し訳なそうに現れた。

「いいよ。俺達も今来た所やでさー。」

俺が春樹に叫んだ。

「あらがど。あ、紹介するね 会社で知り合った、山田凜花ちゃん！」

俺はこの時ことを今でも覚えている。初めて凜花を見た時俺は彼女に見とれてしまっていた。長く伸びた黒い髪、ほそりした顔立ち。また元凜花は俺の好みの子だった。

「はじめまして。山田凜花です！よろしくね。」

彼女は微笑みながら俺達に挨拶した。

彼女の透き通るような可愛い声。笑うと僅かに見える八重歯。

(…ヤバイ。マジでタイプだ…。)

「どうも。俺、浩一言います。よろしく!」

と、俺が内心思っている間に先に浩一が凜花に挨拶していた。
その後に続いて俺も挨拶した。

「は、はじめまして。宍戸旭です。」

微妙に声が裏返つた…しかも噛んだ…緊張してるのバレバレやん…
情けねえ〜

「二人ともよろしくね。」

そういうて凜花はまた微笑んだ。お互いの自己紹介が終わつた所で
俺達4人は料理を注文。

ちなみに4人の席の位置は俺の右隣りが浩一。浩一の正面に春樹、
そして俺の正面に凜花。

料理を食べながら今の心境や、仕事のグチなど色々な事を話した。
でも俺は内心、凜花が正面だったので嬉しいドキドキと緊張のドキ
ドキでいっぱいぱいで何を話したのか覚えていないのが本心だ
った。

俺は高校の時に彼女はいたがこんなドキドキは一度もしなかつた。
今までに味わつた事のないドキドキ感だ。

時間を忘れ話していると、既にファミレスに4時間近く俺達はいた。
さすがにこれ以上はファミレスにいたら迷惑つて事で俺達はファミ
レスを出た。

「んで、これからどうするだ？？」

タバコを吸いながら浩一が言った。今は午後3時。さすがにまだ帰るのは早い時間帯。

「うーん… そうやなーどうしようかあ？？」

考える俺。といつてもこの町は田舎町だ。行く所には限りがある。あるといつたらカラオケ、ゲーセン、ボーリングぐらいだ。

「ねえ！記念に4人でプリ撮らない？？」「は？プリクラすか！？」

正直俺はプリクラが苦手…。俺が高校の時になぜか男だけでプリクラを撮るのが微妙に流行っていた。

しかし撮るとなぜかいつも同じような表情になってしまつ。だからあまり好きではない。

「いいねえ～んじゃあプリ撮りに行きますかあ！？」

(…浩一よ。なんでそんな乗り気なんだ？彼女にチクるだ？)
なんて思つてたらいつの間にかゲーセンに到着。

そしてプリクラを撮つた。やっぱり俺はいつもと同じ表情で写つていた。

(でも、凜花ちゃんと一緒にプリ撮れたから、よしとするかな)その後はゲーセンの喫茶店横でまた3時間ぐらい4人で話して、帰つた。

今日は久しぶりに楽しかったと感じた一日だった。

ただ一つ心残りなのは凜花にアドを聞けなかつたことぐらいだ。
今日一日の事を振り返つてゐるうちに俺はいつしか眠つていた。

あの時のプリクラは今も大切に持つてゐるよ。初めて会つた時の記念だからさ。

ずっとこれからも大切に持つていいくよ。また君に会えるその日が来るのを願つて。

第四話・再び……そして……

4人でファミレスに飯を食いに行つてから、数日が経つた。俺は、あれから特に変わったこともなく日々仕事に励んでいた。

「あき～仕事お疲れ」

仕事が終わり、着替え、タイムカードを押して車に乗り込むとしたら、幸に声を掛けられた。

「おお～。幸もお疲れさん」

「ホント疲れたよ……（笑）ねえねえ！これからじ飯食べに行かない？」

「いいけど、誰と食いに行くんだ？？」

俺はタバコに火を付けながら幸に聞いた。

「それは秘密！行つてからのお楽しみってことだ。」

「？…まあいいか。」

といつわけで、幸の車に案内されながら俺はレストランに向かった。

付いたレストランは前、俺と浩一と春樹と凜花で飯を食つたファミレスだった。。

「……」

「どうかしたの？？」

幸が首を傾げながら聞いた。

「いや…別になんでもない」

隠す必要はなかつたがとつたの反応（～）で言わなかつた。

「？。それじゃはいろつかー。」

幸の話によると、もう一緒に食べる予はファミレスに来ているらしい。
レストランに入り、幸の後ろに付いていく。

「おまたせえ～。」

どうやら、幸の言つていた友達の席に付いたらしい。
しかし、俺は席に座つていた2人の女子の内の一人に見覚えがあつた。。。

「あれえ？？旭君！ー！」

「あ…。どうもです。」

そこに座つていたのはまさかもなく凛花だった。

「あれえ？？2人とも知り合い？？」

幸が興味津々に聞いてきた。。。

「ああ……ちょっとね……」

「なにそれえ？？」

「2人だけの秘密かな（笑）」

凛花ちゃんが笑いながら言つた。
(やつぱ可愛いなあ～)

とか思つていた。

「ていうか私は放置ですか？？」

凛花の隣に座つていた子が冗談半分で言つた。

「『めん！』紹介するね。私の親友の前田綾ちゃん」

「はじまして。前田綾です。」

前田綾。メガネを掛けっていて髪はパークをかけている。

見た目はとても『優等生』って感じの子つてのが前田綾の第一印象
だった。

「どうもです！六戸　旭つす！」

…とまあ挨拶は軽く終わらせ俺達は飯を食つた。

しかし、男は俺一人、他3人女つて言うのは正直緊張もんだ。

しかも、3人とも美人だ。（まあ、幸は美人かは謎だが（笑））

その後は、また前と一緒に3時間ぐらいファミレスで話をしていた。
話の中で俺は、

「……ていうか幸と凛花さんばかりで知り合ったの？？」

「俺が一番気になっていたことを聞いた。

「それは、秘密……（笑）」

3人は笑いながら言った。

（かなり気になるんですけど……）

ホントに何処で知り合ったのか謎だ。
幸と凛花さんは住んでいるところも、中学も高校も違う。
まったくといって接点がない。

しかしながら女の子はスゴイと感じる。ビックリ知り合いがいるのか
分からぬ。

まったく恐ろしい限りだ。

そして、ファミレスを出て帰ると、

「ねえ。旭くん？？メアド教えてよー。」

凛花に言われた。俺が聞こいつと思つていていたのに向こいつから聞いてく
るなんて、

俺は一瞬フリーズしたが、平然を装い、

「いいよ……交換しよまい！」

そして、交換！！（やつたあ～！～！～！）心のなかで叫んだ。
その後に綾さんとも交換。
めっちゃ嬉しかった。

「それじゃあまたねー！」

別れの挨拶をして俺は家に帰った。
家に帰つて、携帯を見てみる。メールが2通届いていた。
1通目は綾さん。

「今日はありがとうございました。（以下省略）」 簡単言えれば食事のお礼。
綾さんには悪いが簡単にメール送つて、2通目を見てみる。と、凛
花だった。

「凛花です。この前と今日はありがとうございました。旭君と話せ
て楽しかつたです。（笑）

また暇な時にメールして下さい。それではお休みなさい。」

みたいな感じのメールだった。俺は一人部屋で「よつしゃあー！！！
！」と叫んでいた。

その後は、凛花とメールをしている間にまたいつの間にか眠つてしまっていた……。

——君からの初めてのメールは今はもう残っていないよ。

君とは数え切れないほどのメールをしたね。

君があんな事になるなら君とのやり取りのメールを残してお
けば良かつたと今後悔して……いるよ。あの時初めて君からメー
ルが来た時ホントに嬉しかつたよ。

君は僕のメールを見てどう思つた？？どう感じた？？教えて
くれ……。

第五話・「パンジー店員

凜花からメールが来た日（正確には飯を食いに行つた日）から俺は毎日の用にメールをしている。

内容はいつも下らない話し。会社の話しゃ、身近で起こつた事など色々メールをしている。

毎日が平凡でつまらなかつた俺にとつて凜花とのメールはとても楽しかつた。

次第に俺は凜花を好きになつていつた。

就職して1ヶ月が経つた。俺は仕事に大分慣れてきた。初めは中々上手くいかなく、主任によく怒られていたが最近は逆に色々アドバイスをしてくれる。

今日も一日を終えた。

「お疲れ様！」

暗い声で言つてきたのは俺と同期に入社した、古島吉城。こいつを一言でいうと

「地味」

だ。よく学校のクラスにいる、根暗系だ。

「ああ……お疲れ」

俺はあまり吉城と関わりたくないからいつも適当に返事をする。

そして、吉城は仕事をやりだす。俺が働いている所は2勤交代制だ。

その後俺はそそきと会社を出る。

車に乗り、エンジンをかける前にメールが来ていいかチェックす

る。もちろん凜花からのメールをだ。しかし、メールは来ていない。
今は午後4時過ぎ。

「まだ仕事中かあ～」

溜め息をつきながら独り言を。。。

最近はいつもこんな感じに凜花からのメールを待っている。寝る事よりも仕事をする事よりも、ダチと遊ぶ事よりも凜花とメールをしている事が今の俺には一番だった。

一応をセンターにも問い合わせをするが当然の事ながらメールは来ていなかつた。

「ま、しょうがないかあ～」

と自分に言い聞かせ俺は車のエンジンをかける。

「あーそういうやあタバコないなあ～。コンビニでも寄るかなあ～

何気なく俺は帰り道のコンビニに寄る。

「あ…い、いらっしゃいませ～」

高校生バイトの店員さんが挨拶。しかも何故か微妙な噛み。まあ吉城みたいに暗く挨拶されるよりマシかな。そんな事を考えながら俺はパンとジュースを選んで持つてレジへ。

「セッタのソフトパック

店員さんに俺は普通に言つ。(ホントは未成年だからダメなんだけどね)

「は、はい。」、「合計780円になります。」

(普通に売つてくれたし。ラッキ〜!! そして、何故か知らないけど、やつさからめつさ噛んでいるんですけど。新人さんか?)
俺は小銭がなかつたから1000円札を出した。そして、お釣りを貰つ時に、

「あ、あの……し、宍戸先輩ですかよね??」

「え?」

いきなり店員の女の子に名前を呼ばれたから俺はビックリした。

「わ、私、先輩と同じ高校で2年の鈴木友香です。」

「……」

…思ひだし中（　　”　　）
(こんな子いつたけなあ〜。うーん…いたよつな気がしなくもない
けどな…)

俺が頑張つて思いだしていると、

「わ、分からなくて当然ですよね。一度も話した事ないですから。」

彼女は寂しい顔をして言つた。

「「」めんなあ〜」

「ぜ、全然いいですよ。気にしないでトセー。」

…そんな事言われて気にします。

俺は人の顔や名前を覚えるのが苦手なのだ。高校時代は後輩の名前はほとんど知らない。知っているのはほんの一握りなのだ。

「ホンマ、『メンな……それじゃバイト頑張ってな。』

俺の後ろに他の客が迷惑そうな顔で待っていたのに気が付いたので俺は逃げるよ^リうにコンペー^リーを出た。。。

「あ、ありがとうございました。」

彼女は最後まで噛んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5241a/>

~ありがとう~

2010年10月10日04時39分発行